



冬日, 真冬日

最低気温が零度未満の日を冬日という。ひと冬に出現する冬日の平均日数は、帯広169日・旭川167日・釧路163日・札幌160日・函館130日で、本州では仙台95日・東京43日・大阪35日となっており、南へ行くほど少ない。明け方は零度以下でも日中は気温が上って零度以上になる。本州の人たちは冬とはそんなものと思っているであろう。

まさしく冬日とは、そういう人たちの季節感に

ぴったりする言葉である。だが北海道では適當ではないようだ。むしろ真冬日という言葉のほうがわれわれの季節感にぴったりの表現である。

最高気温が零度未満の日を真冬日とっている。つまり1日中気温が氷点下の日で、氷日ともアイス・デーともいい、まさしく冷凍庫の中の冬である。東京で真冬日を経験するのは何十年に1度あるかないかである。仙台でさえ平均して年間わずかに3日しかない。ところが北海道では南の江差で33日・函館45日・札幌51日・旭川82日・名寄89日で、内陸部では90日以上のところもある。これは平均的な日数で、たとえば寒かった昭和44年・45年の冬は、真冬日が100日以上というところもあり、札幌でも65日であった。

真冬日の出現期間は大体11月から3月までである。普通1月と2月が出現の多い月で、年によっては丸1ヵ月が真冬日の連続というところもある。南の国からはサクラの便りも聞かれようというのに、北海道では4月に真冬日がでることがある。天塩と弟子屈で4月17日が真冬日だったという記録がある。

シバれた朝は夜具のエリがガチガチに凍るということも、日本酒やしょうゆの凍った話もいまは聞かない。たしかに生活環境はよくなっている。だが多量の排気ガスによる脅威は、地球温暖化がいわれて久しいだけに無気味でならない。

(雨田 実記)